

高次脳機能障害と内部障害がある利用者の日常生活動作場面の支援  
—入浴と排泄を中心に—

学籍番号 17 c c 15

学生氏名 鈴木 悠真

I. はじめに

介護老人福祉施設とは、食事や排泄、入浴など日常生活において常時介護を受けながら住み慣れた地域で普通の生活を送れるようにサービスを提供している施設である。

受け持ち利用者 A 様は、自力でできることがあるのに職員の方にやってもらっていた。高次脳機能障害のため気分がむらがあり、日によってこちらの声かけを断られることがあった。また、内部障害があり血圧変動があることから入浴や運動には気をつける必要があった。

そこで私は、高次脳機能障害と内部障害を持っていたとしてもできることは自力でやれるほうがいいと考え、計画を実施した。そこから、利用者との関わり方や声かけの難しさを学んだので報告する。

II. 実習先種別・実数期間

実習先種別：ユニット型介護老人福祉施設

実習期間：2018 年 6 月 25 日～2018 年 7 月 27 日（うち 23 日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A 様 性別：男性 年齢：90 代前半

介護が必要になった主な疾患・障害：心臓の左右の仕切りがつまり気味、高血圧症、高次脳機能障害

ADL：

1 移動

車椅子で手を使うことなく足で自走している。

車椅子に移動するのは一部介助である。

2 食事

食事形態はお粥・みじん食

プラスチックの小さいスプーンで自力摂取をしている。

3 身支度

更衣：一部介助、職員がほとんど介助している。

4 入浴・清潔保持

入浴：週 2 回、一般浴（一部介助）、ほとんど職員が介助している。

清潔保持：水歯磨きは自分でやっている。誤嚥性肺炎があったためうがいをしていない。

5 睡眠

電動ベッドを使用し、良眠、起きるときはギャッジアップ機能を使って起きる

## 6 性格

穏やかな性格である。

がまん強い

## 7 一日の過ごし方

自分の部屋で自分のものを確認したりしている。

部屋やテレビの前にいることが多い。

## IV. 介護の実際

### 1. 情報の解釈・関連づけ・統合

自分で動けるが入浴時の洗体、着脱など職員の方に介助してもらっていた。自分でやらなくなるにより関節可動域が狭くなり寝たきりになるか可能性と意欲低下のおそれがあった。

### 2. 介護上の課題：

できることはやってもらい関節可動域の維持、向上を図る必要がある。

### 3. 介護計画

長期目標：関節可動域の維持、向上、意欲の低下防止

短期目標：自分でできることを行えるようになる。

## 具体的援助内容

○入浴介助時、でできることをしてもらう。

- ・洗うときに声かけをして自分でやってもらう。
- ・着脱の際に声かけをし、できることをやってもらう。
- ・難しいところは手伝う。
- ・血圧の変動に気をつける。

○排泄介助の移動を自走してもらう

- ・立ったときにふらつきがないか確認する。
- ・自走をしてもらえるように声かけをする。
- ・行き先をあえて伝えない、行方理由を加えるなど工夫した声かけをする。

#### 4. 実施及び結果

午前 11 時頃、部屋にいる A 様に「体をきれいにしにいきましょう」と誘導をした。着脱と体を洗うときに「自分で洗うことができますか」と声をかけをすることによって自分で洗うことができた。入浴では血圧変動に気をつけるため、ぬるいお湯を足からかけ「熱くないですか」と声をかけを行った。

A 様は、高次脳機能障害があるため最初は直接お風呂へ誘ってしまい、そのときは応じてもらえなかったが、なぜ行うのか理由を説明すると応じてくれた。洗体も自分で行うように声をかけを行うことにより自力でできた。

自分で洗うことにより自分のペースで行えるためか浴槽に入ってもリラックスされている様子が見られた。

#### V. 考察

今回、短期目標で立てた自分でできることは行えるようになることとして、入浴と排泄のときに自力で洗うことや自走してもらうように声をかけをすることを主に取り組み、その目標は達成できたと思う。A 様の場合、自分でできることが多いが職員のかたが介助していたのは内部障害があり血圧変動があるため無理をさせないということもあるだろうし、時間がないということや疲れさせないということもあると考えられた。だができることは自力で行うことも大切だと考えられる。気分の浮き沈みはどの利用者にもあることだが受け持った利用者は高次脳機能障害によるものもあると思われる。

Dmasio (2010) は感情が意思決定に大きな役割を果たしていることを指摘し、「怖い」「うれしい」などの感情がいきいき働くことによって、人ははじめて機敏で適切な行動をとることができる」と書かれている。

そのようなことから、A 様は入浴や排泄のときに何か楽しみを見つけることで意思決定ができ自分で行う意欲もでたのだと考えられえ。

#### VI. おわりに

自力で行うことがなかった A 様は声をかけを行うことによって自分で行うことができ、やっていくうちに洗う範囲が増えたことから意欲が向上できたと思われる。

今回の実習では利用者の関わりかたや声かけの大切さについてとても深く考えることができた。この方にはこういった声かけや介助がいいと決め付けるのではなく、心身に障害がある利用者の声かけは、その日その日で変わる利用者の気分や体調によって変えることが必要であり、利用者のできることは活動として行うことも必要だと考えられる。今後は内部障害がある方でも医療職と相談しながら、できることは行えるようにしていきたい。

#### 引用・参考文献

- 1) 森田 秋子 (2016) 日常生活から高次脳機能障害を理解する 認知関連行動アセスメント pp18 - 19.